

# バイルラー(ありがとう)モンゴル バイルタイ(さよなら)モンゴル

西脇邦雄(一般財団法人ジオ政策研究所理事長)

西脇邦雄ジオ政策研究所理事長、橋口哲夫ティグレ連合会理事長ら12名のモンゴル訪問団が、8月29日からモンゴルの首都ウランバートルを訪れました。訪問団は、オヨン環境大臣と会見し、モンゴルの知的障がい児施設建設への協力寄金(2500ドル)を手渡すとともに、日本のODA(政府開発援助)でできたカシミア工場などを見学、また大草原での乗馬トレッキングやツーリストゲルで満天の星空を満喫し、モンゴルの大自然を楽しみました。以下は、西脇理事長からいただいたモンゴル訪問記です。(編集部)

\* \* \*

8月29日から9月2日まで、ティグレの橋口理事長、韓国商工会議所の高山会長らとともにモンゴルを訪問しました。橋口さんはモンゴル訪問30回を超えるベテランで、旅行の企画からアテンドまでしていただき大感謝です。

## オヨン環境大臣と会談、寄付金を手渡す

今回のモンゴル訪問は、オヨン環境大臣が主催するゾルグ財団の知的障がい者施設の建設プロジェクトを支援すること、安原記念財団から「月5万円2年間の留学生奨学金」の提案を伝えることも大きな目的でした。



到着した日の夜、さっそくオヨン大臣と会い、寄金を贈呈。知的障がい子ども達にいい教育ができるように少しでもお役に立てればと思います。留学生奨学金の提案にもとても喜んでいただきました。

通訳のツヨさんの話では、大臣は国民的な人気の持ち主です。

「1億ドルの国家予算がいまでは10億ドルに成長した。ソ連崩壊後の混乱期から日本にはとても大きな支援をいただいている。今後も一層の協力関係に期待したい。」

「若者の教育が重要なテーマ。人口が少なく市場規模の小さいモンゴルでは、他の途上国のように繊維産業などの振

興で経済発展するのは難しい。中国が近すぎる。石炭、銅、銀などの資源輸出をしているが、それだけでなく観光や農業に力を入れたい。」

原発の話になり「政府はウラニウムの輸出を考えているが、輸送ルートの住民が恐れて反対運動が起きている。」といったお話もお聞きしました。

私たちの訪問の前の週には中国の習近平国家主席がモンゴルを訪問、20何項目の協定を提案。帰国の翌日にはロシアのプーチン大統領が訪問と、海のないモンゴルは大国にはさまれた中をどう生きるのか？その苦悩も感じさせられました。



## ウランバートルは不動産バブル

ウランバートルの空港は壮大な草原の中にありますが、市内に向かって少し車で走ると、マンションの建設現場があちこちで見られます。「1㎡1300\$」の看板。こんな郊外で坪40万円？市内中心部には「億ション」が登場しています。どうやら、ウランバートル市内は不動産バブルのようです。(写真は、ウランバートルの観光ポイント、ザイサンの丘から見えるマンション群)

現地で、りんくうゲートタワー IGT クリニックの堀ドクターの次兄、大島博行さんに会いました。モンゴルの自然に魅せられて、1985年から夏の間ガイドやビジネスアドバイザーをされています。堀ドクターの縁で、大阪府泉佐野市とモンゴル・トウブ県との交流も氏のお仕事。砂漠植林ツアーのガイドなどもされています。

大島さんの話では、「ペレストロイカのと、政府は国民に0.7㎩の土地所有を認めた。その土地から金や銀、ウラニウ

ウムが採れるとなり、ドイツや中国の資本が入り込んで、土地権利書の値段が吊上がりバブル状態になった。」とのこと。いわゆる資源バブルです。「どうして官僚の人が億ションにたくさん入れるのでしょうか？」など、興味深い話を聞かせていただきました。

冬が厳しいモンゴルでは夏の間しか建設工事ができないのですが、建設現場には多くの中国人労働者が働きに入っています。モンゴルにはすでに4万人の中国人が住み着いていると言われています。韓国勢も韓流ドラマの放映権を無料にし、まず文化・ファッションからモンゴルの若者に浸透しています。

i phone を持ち、おしゃれなスーツを着こなして、アメリカ留学が流行りの若者達、ロシア語が公用語の社会主義時代に生きて来た中高年世代、遊牧を中心とする伝統的なモンゴルの生活様式を守る人たち。……。世代ギャップや経済格差の広がりはどこもたどる道なののでしょうか。(写真は、ウランバートル市内のバス停。夕方の帰宅時)



以下、日記風にモンゴル訪問のエピソードを綴ります。

### ツーリストゲルでの乗馬トレッキング

2日目(8月30日)は、ウランバートル郊外のツーリストゲルで一泊しました。

ウランバートル市内から車で1時間半ほど走ると、大草原にツーリストゲルが立ち並んでいました。近代的なビル街から、昔ながらのゲル(遊牧民のテント)での生活の落差にまず驚きます。また、昼夜の気温差の大きさも日本の比ではありません。ウランバートル市内では朝は10℃くらい。吐く息が白い日もありました。昼は20℃を超えてバスのエアコンが入ります。そして、ツーリストゲルの夜はストーブを焚いて寝ました。夜中に燃料を継ぎ足してくれるはずだったのですが、係の人が明け方にしか来なかったため、寒くて寝られない人が続出。ダウンに防寒パンツ、毛布に身を包み、明け方2℃の気温に耐えました。でも皆で見た満天の星は絶景でした。遠くにあるのにすごく近くに見える山々。夏なのに虫がいません。ゲルの屋根はストーブの煙突が突き

出で、丸く空いたままですが、何も入ってきません。それほ



写真は案内してくれた少年たち。みな乗馬の名手

ど自然が過酷なのかも知れません。ツーリストゲルではモンゴル馬に乗ってトレッキングを楽しみました。

「モンゴル馬は、韓国・済州島の馬のルーツ。頑丈でよく働く。元の時代に韓半島に入った。」と同行の高山さん。遊牧民の子供たちは3才から馬を操るそうです。私たちのグループには10才の少年がついて、巧みに馬を操りながら案内をしてくれました。少年の操る馬はおとなしく駆けるのに、私たちの乗る馬は勝手に走ったり、枝だらけの茂みに突っ込んだり、小川で水を飲んだり、なかなか思うようにいきません。私も隙をみて枝に突撃され、もう1人は水飲みしながらしゃがまれてズボンがびしょびしょ。モンゴル馬は人に慣れておとなしいと聞いていましたが、馬は人を見分けます？

途中、遊牧民のゲルを訪れて、馬乳酒、ヤギのチーズや生バターをいただきました。ゲルの中では、おばあさんから孫までの共同生活。家畜は75頭飼っているけれど、羊や馬の顔はすべて見分けることができるんだそうです。

ツーリストゲルから亀石(亀の形をした大きな岩)まで往復2時間のトレッキングは忘れられない体験でした。



写真、ゲルの中は意外と広い



ウランバートルの市場風景

3日目(8月31日)は市内に戻り、庶民の市場と百貨店へ行きました。

日曜日だったので、商品運びこむ車と買物客で市場は大混雑。乳製品はさすがにモンゴル製ですが、野菜や果物は中



国産。百貨店には大きなケーキが並んでいました。大家族で食べるので大きいらしい。昔は子供7-8人は当たり前。

ペレストロイカの混乱期は子供が2人  
**ケーキ(上)と乳製品(下)**  
 やっとだったが、いまは4人くらいにもどっているとのこと。モンゴルは30代以下が過半数(53%)を占める若い国なのです。なぜかおいしいラーメンの店もあるモンゴルの市場風景でした。

## 9月1日に新学期が始まる

9月1日はモンゴルの新学期です。モンゴルの学制は6-3-3制で、小1から高3までが同じ広場に集まって9月1日に入学と新学期を祝います。早起きしてホテルの周りを散歩していたら、上手くこの新学期風景に出会いました。車で送迎も多量に広場は大渋滞でした。スマホで両親や祖父母が記念写真を撮り、小さな花を新入生にプレゼントします。どこの国もかわいい子どもの笑顔は宝物です。「この人だれ?」~保護者のような顔をしながら写真をパチリです。



## カシミア工場

「私は、日本担当マネージャー、エルヘンバヤル・ツェンゲルズルです。大阪では、西川ふとん、カタログハウス、千趣会などにわが社の製品を納めています」。

日本製の機械が動くカシミア工場は、日本政府の無償援助で作られました。製品のブランド名はGOBI。フランス、イタリア、中国、韓国などに輸出されています。すごく綺麗な色彩と、手作業での縫製仕上げ。モンゴル人の繊細な一面が製品に現れています。販売所には旅行客が一杯でした。



## 伝統舞踊劇場

モンゴル滞在最後の夜は、伝統舞踊劇場へ。1人の歌手が二つの声を同時に出すホーミーを初めて聞きました。大

草原に響き渡るような豊かな声量。肩と手の動きが早く、飛び跳ねるダンス。アクロバット。伝統楽器・馬頭琴の演奏、日本の雅楽のような不思議な面の舞。日本にたどり着いた芸能ルーツを見ているような感覚でした。



\* \* \*

今回の旅行では、JIC 大阪の小原浩子さんに大変お世話になりました。充実した旅行日程を組んでいただき、感謝しています。

モンゴルには、夏の間は成田空港から週 5 便、関西空港からも火曜日と金曜日の週 2 便の直行便が飛んでいます。(冬季は成田-ウランバートル間週 2 便)。今回の旅では、帰国日が直行便の飛ばない 9 月にかかったためソウル経由で大韓航空 (KE) を利用しましたが、ソウル経由、北京経由もふくめて、モンゴルへのアクセスは随分便利になりました(直行便の飛行時間は 4 時間半で、日本との時差は 1 時間)。

現地通貨よりも米ドルが通じるとのアドバイスでドルを持って行きましたが、本当にそのとおりでした。ウランバートル空港には、VIP サービス(1 人=30 ドル?)もあります。一般客とは別に入国審査を受け、バゲージのピックアップサービスが付いているので、とても楽です。初めての人にはお奨めです。空港からウランバートル市内までは交通渋滞すると聞いていたのですが、結構スムーズに 30 分ほどでホテルに着きました。

日本の 4 倍の面積に、人口はわずか 290 万人。羊の数は 1200 万頭と人間よりもはるかに多い遊牧国家。なだらかな起伏がどこまでも続く大平原。そして日本の大相撲で活躍するモンゴル力士たちの故郷。モンゴルは本当に魅力のある国です。

日本とモンゴルの交流を続けるために、これからも JIC さんと協力して、モンゴル旅行の企画を作っていきたいと思えます。

## 本の紹介

# ロシア縦横無尽

## 未踏の大国 四輪の旅

池田正弘著／東洋書店刊／定価；2500 円＋税

ロシア NIS 貿易会のモスクワ事務所長を長く務め、昨年 9 月に旅行中の沖縄・与那国島で急逝された池田正弘さんの著書が東洋書店から刊行されました。池田さんはモスクワ日本商工会(現ジャパンクラブ)の事務局長を兼務しており、ジェーアイシー旅行センターも 2006 年にモスクワ事務所を開設して以来、随分お世話になってきました。

池田さんは、1976 年に東京外国語大学を卒業後、ソ連東欧貿易会(現、ロシア NIS 貿易会)に入り、長期にわたってモスクワでの勤務生活を送りました。その間、ロシア各地を訪れ、多くの友人知人を作りつつ、日本とロシアのビジネス関係の発展に尽力しました。

池田さんの足跡はほとんどロシア全土に及んでいます。現在 80 余りあるロシアの州、地方のうち、なんと 60 以上の地域を訪問したといえます。本書は、自らハンドルを握り、愛車を駆って文字通りロシア全土を走りまわった経験をもとに、著者がそれぞれの土地の印象や出会った人物、エピソードなどを書き綴った旅行記です。

33 項目の目次を見るだけで池田さんが訪れた町や地域の広さと多彩さがよくわかります。

- ・アストラハン — 豊かで華やかな画風を育てた町
- ・ボルガ水源 — 「母なる川」はここから始まる
- ・ノーヴァヤ・イギルマ — タイガの奥地
- ・ムルマンスク — オーロラ紀行
- ・コストロマ — 「黄金の環」の魅力
- ・ハンティ・マンシースク — ロシアのクウェート
- ・ホールイ — ロシアの工芸の里
- ・トムスク — シベリアで最も美しい町
- ・クラスノダール州 — 棕櫚の木が茂る黒海のリゾート、・・・

「あなたはここに初めて来た日本人だ」。本書には池田さんが地元のロシア人にこう言われる場面がよくできます。ロシアには外国人が一度も訪れたことのない魅力的な町や地方がまだまだたくさんあります。本書によってロシアの魅力を新たに発見したり、再発見したりする人は多いに違いありません。

旅好きで、人好きだった池田さんの著書に誘われて、まだ行ったことのないロシアの町や村を訪れて、ありのままのロシアを感じてみたいものだと思うのは私だけではないはずです。池田さんのご冥福をお祈りします。(F)